

一宮と加納家の関係は江戸幕府の8代将軍・徳川吉宗の側近の加納久通が享保11年(1726)に一宮本郷村を含む長柄郡を加増されたことに始まります。その頃は陣屋が伊勢国八田(三重県四日市市)にあったため「八田藩」と呼ばれていました。八田藩4代目の加納久鷹のとき、文政9年(1826)に陣屋を一宮に移し、「一宮藩」が誕生します。

歴代の藩主は内政や海防に尽力だけでなく、幕府内部でも要職をつとめていました。ここでは歴代の藩主から2人をピックアップします。

加納久徴 (1813~1864)

文化10年(1813)、伊勢八田藩主の加納久愷の世子・久鷹の長男として誕生。天保13年(1842)に父の隠居にともない家督を相続します。大番頭、講武所総裁、奉者番、若年寄など幕末期の幕府の要職を歴任しました。また、文久元年(1861)の孝明天皇の異母妹・和宮が将軍・徳川家茂に降嫁した際には京から江戸までの道中の警護役を勤めました。

文久3年(1863)11月に九十九里沿岸で真忠組の乱が起ると、他藩と協力して翌年1月には鎮圧に成功するという功績を挙げました。歴史文化にも造詣は深く、平安末期の上総広常の故事にならい、天保14年(1843)に玉前神社に甲冑(萌黄緘胴丸)を寄進したり、同じく広常の居城跡と伝わる高藤山城址に文久2年(1862)にその武功を称え「古蹟の碑」を建立しました。久徴の足跡は様々な形で一宮に残されているのです。



萌黄緘胴丸【町指定文化財】



洞庭湖記念碑【町指定文化財】

加納久宜 (1848~1919)

嘉永元年(1848)に陸奥国下手渡藩主の立花種周の弟・種道の子として生まれました。慶応2年(1866)、上総一宮藩主・加納久恒が急死したのを受けて急遽加納家に養子入り、19歳で藩主となりました。明治維新後、一宮藩知事ののち、岩手師範学校初代校長、新潟学校長、大審院検事などを歴任、教育・司法の分野で活躍しました。明治27年(1894)に鹿児島県知事に就任、農業振興やインフラ整備・教育面で大きな功績を残し、西南戦争で無気力化していた鹿児島を近代化に導きました。

明治45年(1912)、一宮町長に就任、農業振興、耕地整理、名士の別荘誘致、一宮女学校の開校など多くの事業を推進しました。大正6年(1917)に町長を退任するも、その後は毎日、名誉町長格で役場に出動していたといわれます。大正8年(1919)、療養先の大分県で亡くなりました。この3年後、一宮町民の多くの要望により、城山に分骨を納めた墓が建立されました。今なお、久宜公は一宮の町を見守り続けているのです。



加納久宜真影



加納久宜公の墓

一宮藩歴代藩主

- ①加納久鷹 (1797~1847) 藩主在位：1821~1842
- ②加納久徴 (1813~1864) 藩主在位：1842~1864
- ③加納久恒 (1846~1867) 藩主在位：1864~1867
- ④加納久宜 (1848~1919) 藩主在位：1867~1868
一宮藩(県)知事：1868~1869

